

口語詩句奨学生には31名の応募があった。もとより応募作品は、口語詩句投稿サイト72hに投稿されたものうち、佳作選考されたものであるから、いずれも一定水準以上のものといえる。一見すると、応募者数が少ないようにも見えるが、応募要件を満たすには、口語詩句投稿サイト72hに投稿し、そのうえで佳作選考された作品のうちから10作品を応募しなければならないから、既にその時点でふるいにかけられている。複数の選考委員の選とはいえ、年間をとおして投稿を続けながら、佳作に選考されたものを10作品以上得るというのは簡単なことではなく、そういう意味では、惜しくも奨学生を逃がした方についても自信を持つてほしい。

今回の奨学生への応募は、こうした応募方法の影響を大きく受けたように思う。それぞれの作品は一定の水準を満たしてはいるものの、連作としてみた場合、作品の配置が何故そうなつてているのかわからないものがあつたり、全体としてバランスの悪いものがあつたりした。私は10作品を連作として見たことから、全体としてよりまとまりのある方を入選として推すことがあつたが、将来性や作品の斬新さといった点に重きを置いたならば、自身の選も変わつたと思う。実のところ応募者全員の実力が拮抗していたというのが全体の印象である。口語詩句投稿サイト72hへの投稿数の多寡及び作風の確立の度合いが、奨学生に選ばれるかどうかのわずかの差を生んだともいえる。

口語詩句奨学生の応募作品については、俳句、短歌、短詩、またはそれらの混在といった様々な表現を可とするものの、口語であるということが一つの条件となつている。定型の場合、表現の広がりから文語表現を選択するということは充分理解できるし、文語表現が今という時代を問えないということは決してない。しかし口語にあっても表現の多様性を担保するひとつの試みとして、定型の枠を超えた表現を模索するということは、俳句における自由律の試みのように間違つた方法とはいえないだろう。今、何故、口語なのか。それは他者にことばを

伝えるという幻想を手放さないことにあら。

尚道

冬晴れの

天よ

つかまるものが無い

私はこの死刑囚の句（『異空間の俳句たち』海曜社…
1999年2月20日刊）が忘れられない。時に、ことば
がその状況において収容所をも可能とする官僚的なもの
へ簡単に変化するのを見て無力にさいなまれるかもしれない。
そしてことばもまた、状況における産物でしかな
いということを思い知らされるかもしれない。しかし、
どんな状況にあっても、ことばは人間であることを止め
ない。私は、皆さんがどんな厳しい状況に置かれたとし
ても、それに抗うことばを手放さないことを切に願う。
最後に皆さん的作品をいくつか紹介をしてこの評の終
りとしたい。

奥村俊哉（宮城県）

蝶に触れ／言葉の／

鱗粉／風へ

遠雷／妹が眉毛を剃りはじめる

関朱夏（神奈川県）

改札を出たらひらたい海ひとつ／抱き寄せるから死んで
いいから

大橋弘典（群馬県）

月彦全句集を抱き汗の腋

白野実悠（新潟県）

逆光のかみのけゆれる　たましい／は星になるときいち
ばんほんとう

中矢温（東京都）

玄関の芳名帳と白日傘